
スクランブル・コネクション

瀬谷和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクランブル・コネクション

【Nコード】

N2606Y

【作者名】

瀬谷和泉

【あらすじ】

妹溺愛のありがちな兄、割と無愛想な幼馴染み、ちよつと意地悪な高校の先輩。王道設定な逆ハーをさらつと短めにしたお遊び短編。

一話 「兄。赤石テルのターン」

休日のお兄ちゃんがスーツ姿で仕事以外の用事に出かけるのも珍しい。

彼女とデートなのかと尋ねたら「とんでもない!!」とものすごい剣幕で否定したから、あれはきつと照れ隠しなんだろうなって思ってたんだけど。

「だからテル兄、オレがきっちり留守預かってやるから。心配しないでさっさと行って来いよ」

「人の家に黙って上り込んで来るようなお前と香里奈を二人きりにさせて、心配せずにいられるか。そっちこそさっさと出て行いったらどうだ?」

「やだね」

隣の家に住む幼馴染みのルカとお兄ちゃんが揉めていた。

「まだやってるの? お兄ちゃんは約束あるんでしょ、時間大丈夫なの?」

「そーだ。男の方が見合いに遅刻なんてシャレになんねーだろ」

一瞬の沈黙が過る。

「ルカお前!」

「お見合い!?!」

驚く私とルカに詰め寄るお兄ちゃんの声が重なった。

「例の伯父さんに頼まれたらしいぜ」

就職先を決めあぐねていたお兄ちゃんに、自分の経営する会社へ入社を勧めてくれた親戚の伯父さんだ。

事情を知らない私が説明を乞うような眼差しを向けると、ルカの胸ぐらを掴んでいた手を外し膝を折って目線を合わせたお兄ちゃんが、申し訳なさそうな顔をする。

「結婚なんてするつもりないけど、義理立てでね。最初から断って来るつもりだったから、わざわざ言うこともないと思って黙ってた」
「別にびっくりしただけで怒ってるわけじゃないよ？ けどお兄ちゃん付き合ってる人いないんだし、最初から断るつもりなんて言わないでちゃんと話してきたら？ ひよつとしたらすごく素敵な人かもしれないじゃない」

もったいないとばかりに力説する私に、ますます悲しげに眉を下げて尋ねてきた。

「香里奈はそれで平気なのか？」

父子家庭で海外出張の多い父親代わりに私の面倒を見てくれたのは、八つ上のお兄ちゃん。寂しくないようにいつでもそばにいてくれて、学校行事にだって来てくれた。

優しくてカッコよくて、女の子が家まで訪ねて来たことも一度や二度じゃない。

それでも誰とも付き合ってた来なかったお兄ちゃんは「香里奈が一番大切だから。香里奈といるのが一番幸せなんだ」って笑って言うだけだったから、重荷になんてなりたくないって思ってた。

大好きだから、私だって幸せになって欲しい。

「だって遠くに行くわけじゃないし。お兄ちゃんはそろそろ私じゃない誰かを幸せにしてあげること、始めてもいいと思うから。私は十分大切にされてきたし、彼女が出来たってもう妬いたりしないよ？」

二十代も半ばに差し掛かろうとするお兄ちゃんには遅すぎるくらいだと思う。ひよっとしたらこっそり付き合ってきた人もいたのかもしれないけど、堂々彼女の話をしてもらえる妹になりたいよ。にっこりと優しく微笑んだ顔にホツとした。

「オレは嫌だよ」

「……へ？」

「香里奈以外を大事になんて出来ないし、したくもない」

てつきりやって来るのかと思っていた納得の台詞とは真逆だった。言葉だけなら駄々を捏ねる子どもみたいだけど、その顔は真剣だ。

「お兄ちゃん……」

だけど　なんだろう。切なそうに瞳が揺れている。

叱るときに見せるのとは少し違う、中に潜んだなにかこう……熱いものを感じた。初めて目にする表情に戸惑って何も言いだせなくなった。

「テル兄、時間」

緊張を断ち切ったのはルカだった。

指摘されたお兄ちゃんは腕時計に目を遣ってから小さくひとつ、溜め息を落として。

「早めに帰って来るから」

取り出した財布の中から一万円札を抜き取り手渡してきた。

「遊びに行っておいで。家で二人きりでないならルカと一緒にでもいい。ただし映画はダメだ。出来るだけ人目の多いところへ行くこと」

「……. どんだけ警戒されてんだよオレ」

「失った信頼は簡単に取り戻せないと学習する、いい機会だろう」
「ふん」

つい、と顔を背けたルカを鋭く睨んだお兄ちゃんの顔からしたら、
“失った信頼”はただ事じゃない。

「なに？ ルカが何かしたの？」

「しょうもない、バカなときさ。一緒に出ようか。駅まで送るから」

二話 「幼馴染み。黒岩ルカのターン」

テル兄がくれた金なんかで遊びたくねえ。

どこまでも反抗的な態度を貫いて、行き先はルカが決めた。

しっかりと握られた手に引かれながら電車で乗り換えること二回、一時間ちよつと。

家からは一番近い距離にあるのに、ずっと避けていた場所だった。そこはオフシーズンに突入した海。

水面を撫でて吹いてくる風がひんやりと冷たい、秋の始め。浜辺を歩くまばらな人たちとサーファーたちを眺めていた。浜辺に繋がるシヨツピングモールで買った日傘が役立つくらい、日差しはまだ強い。

「海なんて久しぶり」

「オレは結構来てるぜ」

「……そうなの!? ルカ、もう平気になったの!？」

まあな、って笑う横顔に抜け駆けされたような敗北感を抱く。

小学一年の時。

ルカの家族に連れられて遊びにやってきたこの海で、私は浮き輪から抜け落ちて溺れかけたことがある。近くにいた大人の人に救出されてからはすっかりトラウマに。

すぐそばで一部始終を見ていただけのルカも、シヨツクでそれ以来海が苦手になってしまっていた。

「今でも夏になると、時々夢見てゾツとするけどな。お前が海面から消えてった瞬間は一生忘れねえ」

「……でも克服したなんてすごいじゃない。ひとりで通ってリハビリしてたの？」

「そ。お前がテル兄から海に近づくなって散々言われてた時にな」

自分が目を離したばかりに。

お兄ちゃんが私へ必要以上に気を使うのはあの日がきっかけだったきがする。だから今日だって、海に来てるなんて知ったらきつと血相変えて怒るに違いない。

「香里奈は来てみてどうだよ。やっぱりまだ怖いのか？」

「こんなに離れてる今でもドキドキしてるけど……思ってたよりは意外にましだったかな。浜辺にすら降りられないと思ってたもん」

「あれから十年も経ってりや、そんなもんだって。避けてばっかじやなんも解決になんねえってのに、テル兄は香里奈の事となるとバカ兄貴丸出しでどうしようもねーよ」

突然ルカが立ち上がって手を取る。

「なにっ？ どこ連れてくつもりよ」

反射的に振り払って両手で日傘に縋りつくように拒絶した。

「とりあえず、波打ち際？ トライしてみようぜ。平気だって。オレがついてる。何があったって絶対助ける。だから信じてこの手を取ってみるよ」

再度手を差し出して、今度は私に選択権を与える。

腹を据えろと言われているんだろ。自分で恐怖を断ち切らなければ何も変わらないって。

夏休みの部活動ですっかり日焼けした幼馴染みの腕は、真っ白な私のそれとは全然違う。男の子の逞しさを改めて感じながら委ねるように手を重ねた。

「絶対、離さないでね？」

怯えたように言う私を見下ろしたルカが一瞬だけ目を丸くした。

「……………ああ」

小さく頷いて五本の指をきっちりと絡めてくる。

時折強く吹く風までも日傘ごと私を後押しするようだった。手前で靴を脱いで自分の足で海の砂を踏みしめたのは十年ぶり。

恐る恐る足を踏み出す私がいじれたくなったのか、ルカは繋いでいた手を離して私の肩を攫うように抱いた。

「ビビり過ぎ。そんなに怖けりやしがみついでろ」

「あ、う……うん」

日傘が当たらないようにと傾けて、片腕をルカの背中に回した瞬間。

「あっ」

煽るような風が吹いて私の手から日傘を奪って行った。

ふわりと宙に浮いて踊るように沖に向かって飛んでいく。

「取って来てやる」

走り出したルカの背中が一気に小さくなって行くと、私は思い切

り叫んだ。

「ルカ！ やだ行かないで！ 私のこと置いて行かないで！」

日傘なんていらなから足の震えを止めて。

足元を浸食していく砂が、あの日私を飲み込んだ海のようにいずればっかり大きな口を開けそうに堪らなく怖いよ。

ひとりにしないで。そばにいて。

「ここにいてルカ！！」

半泣きになると慌てて駆け戻ってきたルカが「悪かった」と力強く抱きしめた。

体温とルカの匂いにホツとしてその胸に頬を摺り寄せると、小さな声が私の名前を呼んだ気がした。

「ル……」

顔を僅かに上向けると掠めていった唇の感触。とくんと高鳴った胸の音。

今のは、キス？

目を瞬かせる私にルカが微かに口元を歪めた。

「お取込み中悪いんだけど」

絶妙なタイミングでやって来た第三者の声に互いの体がびくりと震える。

海から現れたウェットスーツ姿の人の手に、飛ばされていった日

傘が握られていた。

「これは、拾わなかった方が良かったかな？」

肩を竦めて苦笑いを浮かべるその人は、

「白砂……先輩？」

高校の先輩だった。

三話 「先輩。白砂ケントのターン」

濡れた髪を全体的に後ろへ撫でつけて全開になっていた額。シルバーフレームのメガネもなかった。

高校では吹奏楽部に所属する先輩が、まさかのサーフィン、まさかのウェットスーツ姿。

制服姿からは想像もつかなかったがうちりとした体型。

なにもかもが違ってた。

「そんなに警戒しなくても、誰にも話したりしてないって」

くすりと笑うその人が、昨日海で出会った白砂先輩だ。

同じ図書委員を務める先輩とは、四月の顔合わせから意気投合して仲良くなった。一緒に受付の当番をすることも多い。

「彼氏いないって聞いてたから正直びっくりしたけど　なかなか強面な彼だね。偉い睨まれたよ。赤石の好みとしては意外だったかな」

「ルカはっ……あの人は私の幼馴染みで別に付き合ってるわけじゃなくて……顔も、愛想がいいわけじゃないんですけど本当はあんなに無愛想な感じでもなくて！　でもごめんなさい、せっかく日傘拾ってもらったのに、不快な思いをさせてしまいました」
「ああいいよ別に、そんなのは気にしてないから。でも幼馴染みって　平気でキス出来るようなフランクな関係なの？　ああ、帰国子女とか」

「ち、違うんです、あのキスはっ！」

しまった、と思った時には図書室内のあちこちから好奇の視線を向けられていた。

「可愛いねえ、赤石」

私の頭をなでる先輩は、そのまま何事もなかったように手元の本へと視線を戻した。

放課後の当番は私ひとりだった。

テスト前以外は利用者が多くない図書室は閑散としている。静まり返った場所にいると、色んなことを考えてしまう。

“平気でキスできるようなフランクな関係なの？”

あれは不意打ちだったから驚いてどうすることもできなかっただけ。け。

掠っただけだし……あんなのキスとしてカウントするのもしかと思うけど……。

「でも私、初めてだったのにな」

唇が触れたと分かってても、嫌じゃなかった。

けどちょっと後悔したような顔をしたルカの反応が気になってる。昨日は結局最後までそのことには触れて来なかったし。

「たまたま当たっただけとか？ そっか、あのルカの反応はそういうことだよねきつと。なあんだ」

都合よく自己完結させると、ちょっと虚しくなる。

まるでルカに期待してるみたいな自分に気付いて顔が熱を持った。

「赤石、耳が赤いけど熱でもあるんじゃないの」

背後から声と同時にやって来た手がぺたりと額に当てられて、肩が震える。

恐らくカウンター後ろの控室を通って来たんだろう。

「し……白砂先輩！ 急にびっくりします！！」

昨日といい今日といい、驚かされっぱなしだ。

「暴れない騒がない。んー少し熱い気もするけど」

「だ、大丈夫です。熱があるわけじゃなくて……先輩、部活はどうしたんですか？」

体の位置をずらして先輩の手から逃れた。ひんやりとした感触がまだ残っている。

「今日はもうパート練習に切り替わって僕のところは終わったから、本を返しにね」

カウンターで自ら返却手続きを済ませると、フロアに回って該当書庫へ向かう。

後姿に昨日見たウェットスーツ姿が重なった。体型を誤魔化せない恰好でスタイル抜群だったな、なんて。

（先輩で着やせするタイプなんだな……）

そんなことにはばかり意識が向いている自分に気付いて、慌てて打

ち消した。

「せ、先輩って本読むの早いですよねっ。それ昼休みに借りてたやつでしょう？　いつ読んでるんですか」

「暇をみつけてちょこちょこ読んでると、いつの間にか終わってるんだよなあ。速読、とまではいかないけど本屋で立ち読みするには便利だよ。単行本なら一時間もあれば楽に読み切れるし」

「……安上がりというより、書店泣かせですね。それ」

「そうでもないよ。気に入った本は読み終わっても買ってるしね」
「へえ」

先輩は、本当に本が好きなんだな。

新しく借りる本を二冊ほど手に取って再びカウンターへ戻ってくる。今度は私へ手続きするように差し出して、にっこりと先輩は微笑んだ。

「それはそうと赤石。何が“初めて”だったのか気になるから、教えてくれない？」

「は……え？　あ、あの……それは……」

さっき以上に真っ赤になっただろう私を見て、先輩はお腹を抱えて大笑い。

「盗み聞きするのは良くないと思います……！」

何もかも見透かされているみたいな気分になるのはどうしてだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2606y/>

スクランブル・コネクション

2011年11月7日11時09分発行